

『夏子の冒険』

三島 由紀夫／著（角川書店）

NO IMAGE

この本のタイトルを見て、もう一度、著者を見直しました。三島由紀夫がこんな小説を書いていたなんて！？読んでさらにその思いを強くしました。いわゆるラブ・コメディです。

お嬢様育ちで情熱家の主人公夏子は、どんな青年にも満足できません。若者達の退屈さに愛想をつかし、「私修道院へ行きます」と家族に言い放ち、函館へと向かう上野駅のプラットフォームで、猟銃を背負った青年の目の輝きを見つけ一転、彼について行こうと決めます。恋人を熊に襲われたという青年の敵討ちに同行することとなり・・・北海道を舞台に、夏子の奇想天外な冒険が始まります。予想を裏切る夏子らしい結末が圧巻！「日本語って美しい」と思わせる文体はさすが。村上春樹の『羊をめぐる冒険』はこの作品のオマージュとして書かれたとも言われています。（奥村）

『レンタルチルドレン』

山田 悠介／著（幻冬舎）

NO IMAGE

私はこの本の「レンタルチルドレン」にひっかかり手に取りました。子どもをレンタルするというのはどういうことなのか気になったのです。

夫婦は一人息子・優という男の子を病気で亡くしました。愛する息子を亡くし、二人は日々暗い生活を送っていました。そんな時に子どものレンタルと売買をしているP.I. という会社を紹介されます。リストの中から息子にそっくりな子どもを見つけ、翌日に購入を決めます。しかし幸せな時間は長続きしませんでした。その子どもが夫婦よりも年をとり、顔が溶け、身体の皮膚が荒れていくのです。最後はどうなっていくのでしょうか。

山田悠介さんの作品には、「リアル鬼ごっこ」など背中がゾッとする本が沢山あります。なるべく明るい時間に読むことをおすすめします。（西川）

『トムは真夜中の庭で』

フィリパ・ピアス／作，高杉 一郎／訳（岩波書店）

NO IMAGE

夏休み、叔母の家に預けられたトム。ある夜、1階の広間の大時計の鐘が十三回鳴りました。十三回？不思議に思ったトムがベッドをぬけ出し大時計の近くの扉をあけると、そこには存在するはずのない美しい庭が広がっていたのです。その後も大

時計が十三回鐘を打つ度、トムは真夜中の庭に行き、ハティという女の子に出会います。トムはハティと遊ぶこの夜の時間が楽しくてなりません。ところが、次第に自分が住んでいる世界とハティの住んでいる世界は違っていることに気が付き始めます。果たしてハティは誰なのか。その庭はなぜ現われるのか。ラストには、全ての謎がつながります！この本は、ブックトークで薦めることもあるお気に入りの1冊です。児童文学ですがオトナになって読んでも十分読みごたえのある「時」がテーマの傑作ファンタジーです。（澤）

『山怪－山人が語る不思議な話－』

田中 康弘／著（山と溪谷社）

NO IMAGE

マタギや猟師、山で暮らす方々の体験した不思議な話を集めたエピソード集です。日常から離れた山の中、狐や狸に化かされたという話が多いのですが、カーナビにおかしな方向に誘導されていく話など、最近の話は身近に感じられて怖いのです。実話

だけあってオチのない話も多く、謎が残ったままでモヤモヤとした結末も多いのですが、そこが楽しめます。怖い怪談は数あれど、この本は「こんなことがあった」という話が淡々と綴られていてどんどん読み進められました。個人的に怖かったのは、「汚れたお札」、「飛ぶ女」、「謎の山盛りごはん」、沢で釣りをしていたら急に空気が変わって、沢の向こうから何かが――！という話など。色んな話がありましたが、怪異の理由や原因が分らないものは特に怖いと感じました。（三井）

『ホーンテッド・キャンパス』

櫛木 理宇／著（角川ホラー文庫）

NO IMAGE

大学一年の八神森司は、美少女の灘こよみに片想い中である。人一倍怖がりで靈感がある彼は、彼女が在籍する「オカルト研究会」（通称「オカ研」）に入部する。

オカ研に持ち込まれる依頼はさまざまで、壁に浮き出る顔の染み・い

わくつき物件・降霊会など次々と起こる怪奇現象に立ち向かう。恋するキャンパスライフの中に、背筋が冷たくなるホラーがほどよく盛り込まれており、一冊で二種類の楽しさを味わえる。

本作は映画化もされており、シリーズ一作目から好調な切り出しである。読みやすい短編形式で、夏の暑さ対策に「ホーンテッド・キャンパス」を傍らに涼むのも一つの手かもしれない。（永屋）

『夢十夜』

夏目 漱石／著（岩波書店）

NO
IMAGE

「こんな夢を見た」という書き出しから始まる十夜の夢物語。

二十年前に読んだ時は、「第三夜」が印象的だった。闇の夜、背中に背負う盲目の子どもが百年前に自分が殺した相手だと気づき、子どもが石地蔵のように重くなるという不気味な夢。

改めて読み直して、この他に紡がれた夢も楽しめた。

捕虜となった男が、天探女（あまのじゃく）に惑わされ、女と永遠に引き裂かれるという悲しい「第五夜」。彫刻は作るものではなく、「木の中に埋まっているものを鑿（のみ）と槌（つち）で掘り出すまでだ」との話に、誰でも簡単に彫刻ができると思い込む勘違い男が出てくる「第六夜」など。

短編であるのに、読んだ後に、なんともいえない気持ちになったり、納得したり、考えさせられる。何度読んでも、その時々で感じる何かがあります。（伊藤）

『キャベツ炒めに捧ぐ』

井上 荒野／著（角川春樹事務所）

NO MAGE

「ここ屋」は、東京の私鉄沿線の、各駅停車しか停まらない小さな町にあるお惣菜屋。店を切り盛りするのは、3人の60歳のおばちゃんたち。

オーナーで、明るくてにぎやかな江子さんは、友人と夫が恋仲になってしまい、離婚した経験を持つ。無愛想で

ひねくれ者の麻津子さんは、幼なじみで年下のカレに想いを寄せ続けている。一番新入りの郁子さんは、夫とも子どもとも死に別れた。そんな三人三様の人生模様が、季節の食材や料理とともに描かれます。

^{きのこ}茸の混ぜごはん、ゆり根の入ったひろうす、あさりフライ。ふきのとう味噌のおにぎり、塩味のキャベツ炒め、穴子のちらし寿司…。読むと食べたくなる料理の数々。食欲の落ちるこの時期に。暑さに負けないよう、いかがでしょうか。

（荒川）

『南極大陸』上巻・下巻

キム・S・ロビンソン／著（講談社）

NO IMAGE

主人公のX(エックス)は、失恋の痛みから逃げるように、南極での野外作業に従事していた。或る日の作業中、唯一の移動手段である輸送車を何者かに奪われてしまう。助けも期待できない、GPSも使用できない状況下において、猛烈なブリザードで舞い上がった雪や氷が、砂嵐のように肌を刺す南極の「氷の砂漠」を脱出できるのか。

人の生命が、大自然の前にどれほど無力であるのか、実際に南極に赴いた著者だからこそ、表現できる細やかで圧倒的な情景と場景に、思わず夏の暑さを忘れてしまいそうになる。

静かな夜に読むことで、より浸ることのできるそんな作品です。（西澤）

『地球のかたちを哲学する』

ギヨーム・デュプラ／文・絵（西村書店）

NO IMAGE

この本は、地球がまるいと知られていなかった頃に世界中の人が想像した地球や伝説の中に登場する地球を紹介しています。三角形や楕円形の地球、大きな魚の上にあるなど、今の私達では思いつかないような地球の姿ばかりです。

私のお気に入りのは、長方形の地球です。箱の中に入っていて、雨は天使達が運んでくるそうです。こんなにメルヘンチックな設定なのに、大きさは9000km×18000kmとキッチリ決められていて面白いと思いました。

タイトルを見ると難しい本のように思えますが、解説を呼んで楽しめる、絵を見るだけでも楽しめるフラップ式の仕掛け絵本です。大人から子どもまで楽しんでもらえる本です。夏の暑さも忘れるくらい熱中して読んでみてはいかがでしょうか。（田原）

『人気店に教わる極上かき氷』

柘出版社／編（柘出版社）

NO IMAGE

真夏の救世主といえば…ひんやりかき氷！暑さを一気に解消してくれます。近頃、氷やシロップにこだわったかき氷店が続々と登場し、そこでしか味わえないオリジナルレシピやちょっと贅沢なかき氷が人気を呼んでいます。本書では、そんな人気

店が伝授する極上のかき氷レシピが公開されており、自宅でもお店の味が気軽に楽しめます！各店こだわりの材料やシロップのかけ方、盛り方のコツ、お店情報に加え、かき氷が美味しく見えるカップや家庭用かき氷器の紹介など自宅で美味しく作るための基本ポイントもたっぷり収録されています。夏休み中のお子様と作るのも楽しいですし、忙しくて作る暇がないという方も、とりあえずページを開いてみてください。美味しそうなかき氷の写真を眺めているだけでも、ひんやり感が伝わってきて涼しい気分になれます！（辻）

『波のそこにも』

末吉 暁子／著（偕成社）

NO IMAGE

「^{みなそこ}水底の国」の^{おおきみ}大王にお仕えする少女タマオは、ある朝、地上から落ちてきた幼い少年を助ける。海中の「水底の国」と地上の^{うわ}「上つ国」とは、遠い昔に行き来が途絶えてから、二つの国を行き来できる者はいなくなっていた。「上つ国」の帝だという少年の、

なくした宝剣を探す旅に同行を命じられたタマオ。最初はしぶしぶだった少女にも、旅の目的が生まれて――。

モチーフは平家物語。そこに古事記のエピソードもちりばめられていて、歴史や神話が好きな人なら思わずニヤリとしてしまうのでは。そして多様な「青」を駆使して語られる、水底の情景の鮮やかなこと。タマオたちが泳ぐ明るく透明な蒼の世界が、ありありと思い描けます。要所要所に入る挿絵も、心にくいばかりに効いています。特に物語を締める場面がナイスアシスト！こちらもぜひお楽しみに。（小島）

『海底二万海里』

J・ヴェルヌ／作(福音館書店)

NO IMAGE

世界各地の海で「なにかばかでない物」が船を襲うという事故が発生した。調査に向かったアロナックス博士は、その謎の怪物に攻撃され、不思議な潜水艦に救われる。この潜水艦こそが怪物の正体だったのだ。博士は、潜水艦のネモ艦長とともに神秘

に満ちた海底の旅を2か月間続けることになる。

SFの父と言われるヴェルヌの代表作。潜水服を着て探索する深海の光景、難破船の財宝、巨大生物との戦いなど、海の冒険小説の要素がぎっしり詰まっています。そして何より魅力なのがネモ(フランス語で「誰もいない」の意)艦長！人間不信から海での生活を選ぶのですが、その内面には様々な葛藤があり、人間としてのネモに惚れてしまいます。海を見ると、「この海の中にネモ艦長がいるんやな…」と、つい思ってしまう私です。挿絵も魅力的。(世古)

司書のイチオシ！ ～暑さをふきとばせ！！～

『週末夏旅！—暑い日本が好きになる55の休暇術—』

吉田 友和／著（平凡社）

NO IMAGE

大人になっても待ち遠しい夏休み、暑い季節こそ旅をしたい—。そんな夏好きの旅行作家が綴る、肩の力を抜いて味わえる夏旅ガイド。

幕開けはキャンプからというのが著者の夏の恒例行事となっている。テントを張って野山でビールを片手

に一晩を過ごす。それも人が少ない穴場を探して楽しむ。

また、七月の連休を狙って島旅をしたり、盆踊りで有名な郡上八幡まで東京から愛車で出かけ、一緒に踊りに参加したりと、著者ならではのこだわりがある。自然の美しい郡上で溪流釣りをしていた時に、禁漁区であることを知らず、罰金を払わされたという失敗談も明かされる。

朝顔市で鉢を買って植物を育てたり、自宅を夏仕様に衣替えしたり、時間がなくても近場でも旅気分が味わうことができ、夏を楽しめるということを意識させてくれる。（寺崎）



司書オースメ図書館あんない
市立図書館の本棚から
選りすぐりの一冊をご紹介します

司書のイチオシ！ ～暑さをふきとばせ！！～

『八月の六日間』

北村 薫／著（角川書店）

NO IMAGE

文芸誌の副編集長をしている“わたし”。ひたむきに仕事をしてきたが、生来の負けず嫌い和不器用さゆえか心をすり減らすことも多い。同棲していた男とは、3年前に別れた。そんな人生の行き詰まりを感じていた時に彼女の心を開いてくれたのが、後輩

に誘われたことがきっかけで始めた山歩きだった。

本書に出会った時、これは自分の物語だと感じた。主人公の境遇や思考、行動様式が驚くほど似ているのだ。そして私自身、かつて彼女が歩いた山ルートをたどった一人である。四季折々の自然の美しさ、絶景、一期一会の人との出会い。「一年のうちの数日が日常を支えてくれる」、そんな圧倒的な体験がよみがえる。

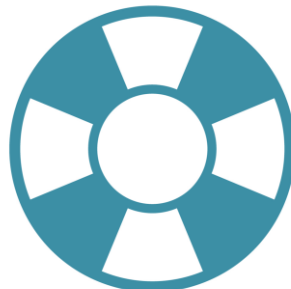
生きづらい現代を生きる働く女子に、そして山ガール予備軍におすすめしたい、山の涼風を感じる一冊。（但田）

司書オススメ図書

あんない vol. 3

今号のテーマ

暑さをふきとばせ！！



2016年8月1日発行

近江八幡市立図書館